

● 平成 29 年度前学期フレッシュマンコース実施レポート

平成 29 年度春期入学式の後、4 月 11 日から 14 日の 4 日間で平成 29 年度前学期総研大フレッシュマンコースが開催されました。今回は全研究科から総勢 63 名の新入生が受講しました。また、各研究科から選出された在学学生からなる学生セミナー実行委員（以後、学生委員）ほか、先導科学研究科及び学融合推進センターの葉山キャンパスの教員多数に加え、各専攻からのフレッシュマンコース担当教員の先生、6 研究科長、興味を持って来られた先生方も参加され、葉山キャンパスのプログラムの中でも、とても賑やかなものとなりました。



学生委員による研究紹介

新入生は、講演会（当日の様子については、トピックス「第 3 回総研大科学者賞講演会」をご覧ください）とショートトークの聴講を通して、研究者としての心得や考え方を理解しました。また、新入生にとって、総研大の先輩方の話を聞いたことは、研究意欲への向上や自身の研究への考え方を見直すことにつながったようです。1 日目の終わりに懇親会が開かれ、新入生は新入生同士だけでなく、参加教員ともざっくばらんに会話することで、交流を深めていました。

2 日目は「学生セミナー」の“研究科・研究紹介（以後、研究紹介）”と「研究者と社会」の“第 1 部 研究者倫理”です。研究紹介は、学生委員がこの日のために作り上げた企画です。学生委員がグループに分かれ、それぞれ新入生に各研究科の紹介や各専攻分野の面白さをプレゼンテーションしました。プレゼンテーション後には、各研究科への質問等をポストイットに書き出し、班ごとにディスカッションを行いました。ディスカッション後の質問タイムでは、新入生から学生委員に対して多くの質問が寄せられ、新入生と学生委員との間で活発な質疑応答が行われていました。新入生からは、異分野（他専攻）交流・理解ができたことについて、良かったという意見が多数ありました。

1 日目は「知のフロンティア」の“総研大科学者賞受賞者講演会（以後、講演会）”と「学生セミナー」の“総研大未来科学者賞受賞者によるショートトーク（以後、ショートトーク）”、“アイスブレイク”が行われました。本年度は、6 研究科長も学生セミナーに参加し、アイスブレイクでは、受講学生は学生委員・教員を含めた 12 班にわかれ、意見交換などを行いました。



研究紹介（学生委員・教員とディスカッションを行う新入生たち）



研究倫理のWSの様子

続いて「研究者倫理」では、新入生が「最良の研究者像」についてワークショップ（WS）を行い、各自で付箋紙に最良の研究者には何が必要かを箇条書きにし、各グループ内で議論しポスターをまとめ、その結果を発表しました。次に、講師から研究における不正行為等の研究倫理についての講義が行われた後、新入生は各自の研究分野で生じうる不正とその対策について、「ショートエッセイ」を作成しました。



研究者と社会（第3部）グループ発表

3日目の「研究者と社会」が続きます。「第2部 研究の社会史」では、現在のような研究者やその支援体制が登場してきた背景や、研究者と社会との関係性の歴史の変遷を、現在の研究者とその研究活動の特徴付ける要素に着目しながら、19世紀頃からの研究（者）に関する科学史が語られました。「第3部 科学コミュニケーション」では、遺伝子組換え（GM）作物の野外栽培実験を巡る社会問題を題材にWSを行いました。新入生が

研究者グループと農業関係者グループに分かれ、それぞれの利害について意見し、「研究者」として社会に伝えるべきメッセージは何か、異なる立場のそれぞれの価値観を理解するとは何か、など科学コミュニケーションについて学びました。

最終日は「研究者のための“伝える”技術」です。この講義では、パラグラフ構造の理解及びアウトラインとはなにかを学ぶ「ライティング」と、国立遺伝学研究所（遺伝研）で開発された科学英語プレゼンテーションカリキュラム「遺伝研メソッド」の講義から「口頭での研究発表（プレゼンテーション）技術」を学びました。午前中は、「ライティング」の講義が行われました。まず初めに講師から、主語・述語の呼応、事実・意見の書き分け、1つのパラグラ



ライティングの講義

フでは1つのことについて書くなど、文系・理系問わない基礎的な文章の推敲方法について講義が行われました。次に、新入生が前の講義内容に基づき課題文を推敲し、2人1組で意見交換を行いました。続いて「要旨作成」では、与えられた要旨作成課題に取り組んだ後、新入生同士がお互いの文章に対する意見交換を通して、文章要約のポイントを身につけていました。午後からは、広海健 総研大名誉教授（遺伝研リサーチ・アドミニストレーター室・室長）による遺伝研メソッドの講義が行われました。「遺伝研メソッド」の講義を通して、受講者は聴衆に「伝えたいこと」を伝える方法や、聴衆への情報提示の技術などプレゼンテーションを身に



遺伝研メソッドを話す広海先生

つけました。

4日間の合宿型プログラムは、新入生にとってハードスケジュールだったようで、全体アンケートには「(期間について)タイムスケジュールがきつい(長い)」という意見がありました。しかし、「異分野の研究活動を知り、視野が広がった(モチベーションが上がった)」という意見が多数寄せられ、異分野交流の観点では多くの学生から高評価でした。新入生の皆さんに、総研大特有の分散型キャンパスではなかなか出会うことのない同期

期学生と過ごしたことについて、専攻を越えて学生間の交流を持てたことが刺激的で、有意義だったと感じていただけた事を嬉しく思います。また、今回は参加学生のうち男性の比率が多かったこともあり、「夕食(昼食)が足りなかった」という意見もありました。なお、その他プログラム内容についても色々と意見がありましたので、今後検討・改善していく予定です。長丁場ではありましたが、新入生の皆様と過ごした本プログラムはとても楽しかったです。

新入生の皆様には各専攻での研究、生活と新しいことが多く待ち受けているかと思いますが、今回出会った仲間との交流をこれからも大切にしていだければと思います。今後、益々のご活躍を祈念しております。最後になりましたが、本プログラムにご尽力いただいた各専攻の先生方並びに葉山の先生方に御礼申し上げます。



【学融合推進事務室】

※本レポートの文章は、総研大ニューズレター第107号(2017年5月)から抜粋されたものです。